

TOKYO ● 2020
CANDIDATE CITY

史上最高の パラリンピックを東京で

山脇 康

日本郵船 顧問
日本障害者スポーツ協会 理事
日本パラリンピック委員会運営委員会 副委員長

9月7日の開催都市決定まで残り4カ月、招致活動はこれからまさに正念場となるが、2020年東京オリンピック・パラリンピック大会開催の意義とその実現について、パラリンピックの視点からいま一度考えてみたい。

昨年のロンドンパラリンピック大会の12日間を日本選手団と共に過ごしたが、パラリンピック大会は、もはや障がい者の競技大会という次元を超え、人間の能力の限界と可能性に挑戦するもう一つのスポーツ競技大会となった。各競技会場は観客で埋まり、特にメインスタジアムでは連日8万人の大観衆の中で、選手は最高のパフォーマンスを発揮し、観客を感動と熱狂の渦に巻き込んだ。さらにGames Makerという新しいコンセプトに触発された献身的なボランティアや、仕事帰りに、そして家族連れで楽しめるパークスタイルの競技会場など、明確なコンセプトと洗練された仕掛けが用意され、参加者全員が一体となった大会は、成熟した先進国でのモデル大会になった。

2020年東京大会はこのロンドン大会を超えてさらに進化した新しい大会とすること

が求められる。確かにロンドン大会は素晴らしい大会だったが、決してパーフェクトな大会ではなく、足りないところもある大会だった。

東京大会開催が実現すれば、ハード面だけでなくソフトの部分においても、日本人が得意とする細部へのこだわり、質の高さ、正確さ、迅速さ、勤勉さ、チームワーク、相互扶助、おもてなしの心を再確認して大会を創り上げ、もっと素晴らしい史上最高の大会にすることができる。

2020年には世界の先進ユニバーサルデザイン(バリアフリー)都市となる東京で、選手、観客、ボランティアそして国民が一体となって真のバリアフリー(施設も心も)環境を実現する史上最高のパラリンピック大会を開催する。これは他の候補都市が決してすぐにはまねのできない、東京だけができる大会であり、なぜ東京開催なのかに対する答えの一つであると思う。

東京オリンピック・パラリンピック大会の開催は、パラリンピアンにも最高の舞台を提供し、彼らの発する勇気、決意、魂の声とパフォーマンスが、観客や国民の感動と共感の渦を呼び起こすだろう。さらに、障がい者に対する意識変革(心のバリアフリー)が広がって、差別のない、人に優しい共生社会の実現と、スポーツを通じた活力のある社会を創造する第一歩となるだろう。

史上最高のオリンピック・パラリンピック大会をぜひ東京で開催したい。